

コラム 西洋古代史の泉 9

本を読む，本を買う

南川高志

日本人の古代ギリシア史・ローマ史の研究者が在外研究や留学で訪れる外国といえば、調査をしたことはないものの、イギリスが一番多いと思われる。私自身もイギリスで在外研究をした一人であり、1996年の10ヶ月滞在や2002年と2006年の短期滞在でイギリスの大学と研究者にずいぶんお世話になった。

私がイギリスを初めて訪れたのは1980年3月のことで、大学院修士課程の1年目を終える頃だった。その時の渡英の目的の一つは、修士論文のための参考文献を購入することだった。イギリスの書店、とくに古書店の事情に詳しい研究室の先輩のK先生（近代イギリス史専攻）に事前に話を聴き、*London A to Z* 地図を借り古書店の場所を確認して渡英した。しかし、結局本を多く買ったのは、オックスフォードのブラックウェル書店だった。当時は為替レートが1ポンド=580円であったから、多く買うといっても限界があった。旅行中の食事をサンドイッチなど簡単なもので済ませて、少しでも本を買おうと意気込んでいた。日本からの注文では買にくいものを選んだように思うが、その時思い切って買った *Coins of the Roman Empire in the British Museum* 等は、後の研究の際、手元にあってすぐに参看でき、有難かった。

この頃のブラックウェル書店は、古代ギリシア史・ローマ史・古典学に関しては、英語以外の言語で書かれた研究書も置いていた。しかし、現在の同書店の同じコーナーを見ると、研究書は英語の本ばかりである。オックスフォードで英語以外の西洋古代史研究書を買おうと思えば、出版でも知られる *Oxbow Books* に行くしかない。まるで倉庫のようなこの書店は、ドイツ語の研究書や考古学の報告書など、ブラックウェルでは見つけられない本を多数置いていて、日本人研究者には有難い店である。

私の印象では、オックスフォードでもケンブリッジでも、古代ギリシア史やローマ史の本を販売する書店の事情は、初めて私が訪れた時に比べて、相当変わった。ケンブリッジでは、オックスフォードのブラックウェル書店に相当するヘッファース書店の古代ギリシア・ローマ史・古典学関係の本の売り場が縮小した。ブラックウェル書店は縮小したとは思わないが、先述したように、英語以外の書物が置かれなくなり、またよく観察すると、研究者や専攻する学生が読む本よりも一般向きの古代史本の置かれるコーナーが訪れるたびに広がっているように感じる。ケンブリッジでもオックスフォードでも、古代ギリシア史、ローマ史、古典学関係の古書

を扱う店はなくなっている。これは、インターネットを通じての販売に切り替わったからであろうが、実際に本を見ながら古書を買う場所がなくなったことは、寂しい以上に不都合である。

さて、古代史に限らないことだが、日本人の西洋史研究者は、在外研究に来ると、本をたくさん購入したり、驚くほどの量のコピーをとったりすることが多いようである。私自身もそうであり、なかなか来られないからと、つい無理をして本を買ったり過剰にコピーをとったりした。特に、最初の在外研究の時は頻繁にコピーをしていた。ロンドン大学ユニヴァシティ・カレッジのコピー・センターをよく利用したが、店番のスタッフにまたこの男かという顔をされた記憶がある。一方、イギリス人の研究者や大学院生はあまり本を買っているようには見えない。ケンブリッジ大学古典学部の古代史の先生3人に、自宅に招かれ書斎に通されたことがあるが、どの先生の家でもさほど多くの本が置かれているわけではないのに驚いた。皆さん書斎以外に本は置いていないといていた。ケンブリッジ大学古典学部の先生は、所属する学寮（カレッジ）と古典学部の両方に研究室をもっている。相部屋のことも多いが、そこはかなり多くの本を置いている先生もいる。しかし、それでも格別多いという印象はない。

大学の自室や自宅に置く本が少なく済むというのは、大学の学部図書室や大学図書館が充実していること、先生たちも大学院生らと同じように学部図書室や大学図書館で勉強しているからではないかと私は考えている。実際、ケンブリッジでもオックスフォードでも、図書室、図書館で教授や講師が勉強している姿を見るのである。日本では、教授はたいてい自分の研究室で勉強するように思うが、イギリスは違うように感じる。学生や大学院生についても、本は所属するカレッジの図書室、学部の図書室、大学図書館と3箇所に配架されているので、買わなくても済むようになっている。ちなみに、私が訪ねたドイツの大学では、古代史ゼミナールの専用図書室に、その年度の授業参考用にと教員が学生のために用意した参考文献が特別に設置されている。同じ本が複数用意されており、学生は本を買わなくとも済むのかもしれない。

以上に述べたようなことは、私の狭い知見に基づくものに過ぎず、誤りがあればぜひご教示いただきたい。また、古代ギリシア史、ローマ史、古典学に該当するだけのこともかもしれない。実際、私が利用させてもらったイギリスの関係図書室は、ロンドン大学古典学研究所図書室とケンブリッジ大学古典学部図書室、ケンブリッジ大学図書館、そしてオックスフォード大学のサクラ・ライブラリあたりに限られるのである。これらの図書室、図書館では、現在電子化が進み、また電子化された資料を利用する環境が整えられてきている。在外研究時にお世話になったケンブリッジ大学の大学図書館（写真）では、2002年の時点では、リーディング・ルー

ムの手前の分厚い図書カタログが並んだスペースに、図書検索のためのデスクトップ・コンピュータがずらりと置かれていたが、かなり前にすべて撤去されて雰囲気が変わった。来館者が自分のパソコンを持参するから、不要になったのである。しかし、システムは変われども、本を読むという行為それ自体が変わるわけではない。ノート



創立600年を迎えたケンブリッジ大学図書館

をとるのがペンと紙ではなく、コンピュータを用いるようになって、本を読むこと、書架の間を歩き回って本を探すことの楽しさ、面白さは変わらない。今年創立600年を迎えたこのケンブリッジ大学図書館は、私にとってこの楽しみを与えてくれる有難い場所である。

聞くところによると、イギリスで刊行された人文学・社会科学系の書物の相当部分が日本の機関や研究者によって購入されているという。日本の大学の予算も個人の懐もだんだん厳しい状態になってきており、今後もそのような状況が続くのかどうか定かでない。日本の大学は、イギリスの大学のように数カ所で学生・院生・研究者のための本を用意するというようなことはできていないので、大学予算が毎年減り続けている以上、研究をしようとすれば、教員はもちろん、学生・院生も無理をしてでも自分で本を買わざるを得ないだろう。人文学のような地味で基礎的な研究にも、恒常的な政府の支援を願いたい。

ところで、私の周囲の本棚を見渡すと、大学の研究室でも自宅の勉強部屋でも、無理をして購入しながら読んでいない本、読んでいないコピーがずいぶん溜まっている。これから1冊も購入せずに今ある本とコピーを読み続けても、生涯の終わりまでの分、すでに十分あるだろう。情けないが、今更何ともならない。以前、研究室を訪ねてきた同学の方に、それらを見せて、値段の高いこれらの本をイギリス旅行中の食費を節約してまで買ったが、無理して買うよりも美味しいものでも食べたらかった、と冗談交じりで話した。するとその方は、本は高かったでしょうが、それでもその本の値段で本当に美味しいものがイギリスで食べられましたか、と言われた。確かにそうだったかもしれない。

